

環境農政常任委員会委員会調査報告書

令和7年8月28日(木)に、かながわ環境整備センター外2か所において、次の調査事件について調査したところ、その概要は別紙のとおりでした。

調査事件

- 1 公害の防止その他環境の保全に関する事項について
- 2 農業、林業及び水産業に関する事項について

令和7年9月18日

神奈川県議会議長 長 田 進 治 様

環境農政常任委員会委員長 石 川 巧 様

環境農政常任委員会委員 井 坂 新 哉

1. 調査の概要

- (1) 調査箇所 かながわ環境整備センター、水産技術センター、農業技術センター三浦半島地区事務所
- (2) 出席委員 井坂新哉
- (3) 調査日 令和7年8月28日（木）
- (4) 行程 自宅 → かながわ環境整備センター → 水産技術センター → 農業技術センター三浦半島地区事務所 → 自宅

2. かながわ環境整備センター

(1) 調査目的

かながわ環境整備センターは、県内で唯一、全国的にも数少ない公立の産業廃棄物処分場です。開設までには地域の反対などもあり、時間を要したこと、地域との協定を結んだこと、環境アセスメントでは、生物の種の保存等の取り組みを明記したことなど、開設から約20年を経過していた中でそれらの状況がどうなっているのかを確認すること。また、残った埋め立て地が少なくなっている中で、今後の施設の運営の見通しや県としての産業廃棄物最終処分場に関する方向性などを聴取することにより、今後の公害の防止その他環境の保全に関する事項についての委員会審査に資するものとしします。

(2) 調査先出席者

- ・ 中田康博環境整備センター担当課長

(3) 委員からのあいさつ

(4) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

- ① かながわ環境整備センターの概要について
- ② 地域住民との連携や地域貢献の取り組みについて
- ③ 現場での説明として
 - (ア)産業廃棄物の埋め立ての現状について
 - (イ)生物の種の保存の取り組みについて

(5) 質疑応答

- ・ **【質疑】**
今アスベストを溶融して再利用する動きがあるが、どのような状況になっていますか。
- ・ **【応答】**
確かに溶融という技術があることは知っていますが、コスト的に合うかなどを踏まえるとまだ実現性については不透明だと思います。
- ・ **【質疑】**

現在アスベストの埋め立てが増えていますが、アスベストは形状が一番の問題で、その形状を崩すことができれば、害はないとも聞いています。溶融は一つの案だと聞きますがどう思いますか。

・ **【応答】**

特別管理産業廃棄物にあたるいわゆる吹き付け石綿などであればコスト的にも合うかもしれませんが、ここで受け入れているような石綿含有廃棄物だと量が多い反面、アスベストの含有率が低いので、溶融をする必要があるのかというときに、今も埋め立て処理ができてきていることとの合理性を判断する必要があるのではないかと思います。

・ **【質疑】**

産廃処分は事業者・民間が責任をもって処理することとなっており、法律上も公共がやることにはなっていません。この最終処分場は民間のモデルとすることを目的としていましたが、本当にモデルになったのかを検証する必要があると思うがどうか。

・ **【応答】**

現場職員としては、目的の一つは安全性のモデルという前提があるので、それだけは絶対に守らなければいけないと思っています。これからも事故などがなく、安全安心なものは最後まで終わるとするのが大事だと思っています。

・ **【質疑】**

今、アスベストの受け入れが多いとのことですが、その他の産廃のリサイクルが進んだことの表れだと思いますが、実際にばいじんなどの受け入れはほとんどないのでしょうか。

・ **【応答】**

受け入れをする県内の産廃処分場がそもそもないのでちょっと分らないです。また、現在、県内にはかながわ環境整備センターの他、横浜の本牧ともう一つ小さい処分場があるだけとなっています。

・ **【質疑】**

産業廃棄物も本当に少なくなったということですか。

・ **【応答】**

産業廃棄物が減ったことは間違いありません。産業廃棄物の量が減っていると同時に最終処分量が減っていますので、そういった意味では最終処分場自体のニーズも減っていると思います。

・ **【質疑】**

産業廃棄物が減ることは環境への負荷を考えると大切なことだと思います。しかし、神奈川県の中でも産業廃棄物が出るので、自区内処理という点を考える必要もあるのではな

いか。将来的な産廃処分について県としても見通しをもって取り組む必要があるのではないかな。

・ **【応答】**

データの言え、現在県内の産業廃棄物の9割程度が県外（千葉県、静岡県、宮城県など）で最終処分されております。おそらくかながわ環境整備センターが廃止後は残りの1割も県外に持ち出される可能性が高いと思います。

・ **【質疑】**

町内会からは何か要望を出されているのか。

・ **【応答】**

今のところ町内会長などからは、「よくやってもらって、ありがたい」等の言葉をもらっています。特に要望は出されていません。

・ **【質疑】**

建設当初の手続きで環境アセスメントも行われ、自然環境の保全については、サンショウウオなどの動植物の種の保存の取り組みが記載されていたと思います。その時に約束したことが、継続しているのか、その状況について教えてください。

・ **【応答】**

サンショウウオやホタルなども生息しています。ホタルの数の調査や植物の調査、分析なども行っており、特段変化はありません。遺伝子を壊さないように場所を移したこともあります。保全を続けています。

また、水質の関係では、重金属類は出ておりません。COD・有機物の指標もありますが、処理をしなくても基準にはあっているような状態になっています。浸出水なども、基本的には埋め立てが終わった部分の上にはキャッピングしている面積によりますが、今、キャッピングが多くなっていますのでどんどん減っています。それらのデータも毎月公表しています。

・ **【質疑】**

産廃の受け入れ料金は他の産廃処分場と比較してどのくらい高いのでしょうか。

・ **【応答】**

他と比べると高いです。料金比較がなかなか難しいところがありますが、石綿につきましては高い方ではあります。

・ **【質疑】**

経営的な話でいえば、収入と支出の状況はどうなっているのでしょうか。

・ **【応答】**

純粋な必要経費、運営管理や埋め立てで必要な工事費、人件費などについては、収入で

賄えるという状況でわずかに黒字になっています。しかし、最初の投資した建設費の回収は難しい状況になっています。

(6) 調査結果

- ・ 産廃処分をめぐる法制度などが大きく変わり、かながわ環境整備センターを構想し、開設した当初とは処理量も処理物質も大きく変わっています。特に、建設リサイクルが進み、建設事業から出る廃棄物が減ったことや産業廃棄物の焼却も減り、ばいじん、焼却灰なども減っています。一方で、当初受け入れを想定していなかったアスベスト含有建材（レベル3）の受け入れが現在では大半を占めるようになるなど、産業廃棄物処理が大きく変わっていることがわかります。当初は想定されていなかったとはいえ、産業廃棄物処理は製造段階からできるだけ廃棄物を排出しない、リユース、リサイクルを優先し、極力産廃の排出を減らす取り組みが重要であり、その視点に立った廃棄物行政が必要であったように思います。
- ・ また、民間が処理することとなっている産業廃棄物の処理を県が担うことについては、当初から疑問が投げかけられ、必要性の一つとして民間のモデルとなるような産廃処分場とすることとしていました。安全性を強化することについては、民間の処分場よりは強化される一方で、受け入れ費用が高くなり、運営費であるランニングコストは黒字になっているとしても、建設費の償還をすることができないなど、費用面では民間のモデルにはならない状況となっています。かながわ環境整備センターは埋め立て期間が約3年ということを見ると、当初の目的に照らした評価が行われる必要があると思います。
- ・ 現在、産業廃棄物最終処分場が県内では少なく、9割の産廃が県外で処分されている現状がありました。アスベスト建材の処理などを含め、県外に産廃処分を依存していることについては、課題が残ることと感じました。県内の事業所等と協議をしてこの課題に取り組むことも必要だと思いました。
- ・ かながわ環境整備センターを開設するまでには、地元からの反対運動もありましたので、地元とは連携を取ることが大切です。今回視察し、これまでの地元町内会や学校などとの取り組みを説明していただき、良好な関係を維持しながら運営していることを確認できました。また、環境アセスメントでの取り組みなどについても引き続き取り組んでいることも確認できました。埋め立て期間が残り約3年ということなので、この姿勢を堅持し、事故等がなく埋め立てを終了できるようにしてもらいたいと思います。今後も、かながわ環境整備センターの運営について注視していきたいと思います。



【年度別受入状況】

年度	搬入量(トン)	搬入台数(台)	収入額(千円)
平成18年度	10,503.11	1,295	268,006
平成19年度	29,567.07	4,579	716,344
平成20年度	21,131.53	4,011	508,973
平成21年度	15,922.31	3,583	346,366
平成22年度	15,190.18	4,469	307,868
平成23年度	16,618.82	5,319	394,879
平成24年度	23,591.02	6,990	553,359
平成25年度	29,894.32	8,957	651,462
平成26年度	26,099.90	9,003	582,276
平成27年度	28,033.18	9,059	589,939
平成28年度	24,432.68	8,639	708,668
平成29年度	22,211.52	7,912	618,041
平成30年度	19,271.62	7,639	605,892
令和元年度	24,437.63	8,377	680,162
令和2年度	25,051.19	8,295	697,958
令和3年度	18,095.31	7,469	539,432
令和4年度	17,702.09	7,803	522,769
令和5年度	16,487.13	8,103	473,925
令和6年度	16,854.52	7,855	479,315
合計	399,095.13	129,357	10,244,534

【施設構造及び管理運営の特徴】

- しり水施設
 - ・底面は二重のしゃ水シート構造に加え、コンクリート及びベントナイトを敷設するなど法令の基準を超える多重構造としています。
 - ・電気的漏水検知システムを設置し、毎日2回、シートに破損がないかチェックしています。
- 浸出水処理施設
 - ・ダイオキシン類について法令の基準を上回る高度処理を行うための膜フィルター及びダイオキシン分解装置を設置しています。
- 粉塵飛散防止対策
 - ・集じん設備を備えた屋内の廃棄物搬入施設で廃棄物を荷下ろししています。
 - ・埋め立てた廃棄物は即日覆土し、飛散防止策を講じています。
- 搬入廃棄物の徹底した管理
 - ・搬入事前審査は、書類審査、サンプル分析、現地調査を実施し、受入基準に適合していることを確認して、各年度の契約を締結しています。
 - ・搬入審査は、目視により品目や荷姿の確認を行い、管理票の品目については50%抽出分析を行い、受入基準に適合していることを確認しています。
 - ・廃棄物搬入施設で廃棄物を荷下ろしして厳密検査を実施し、異物の混入がないことを確認しています。
- 情報公開
 - ・大気、水質等の周辺環境のモニタリングを実施し、結果をセンター内の情報コーナー、地元のコミュニティーセンター、ホームページ等で開示するとともに、自治会に報告しています。

県管理地を活用したイベントのご紹介

田植え

稲刈り

脱穀

- ・NPOとの連携事業
- ・「大楠小5年生」と「一般向け」に開催
- ・ホテル観察会も開催

Kanagawa Prefectural Government

3. 水産技術センター

(1) 調査目的

神奈川県は、東京湾と相模湾に囲まれ豊かな漁場として漁業者を含めた水産業の振

興を図っています。しかし、近年、地球温暖化に伴い、神奈川県沿岸地域では磯焼けが進み、漁業者に大きな影響を及ぼしています。水産技術センターでは、キャベツウニの養殖や早熟カジメの培養などの研究を進め、磯焼け対策に取り組んでいますが、これらの取り組みはまだ研究段階で実際の商品化、藻場の再生までにはさらなる研究が必要となっていますのでこれらの研究について聴取する。また、この他に取り組んでいる水産物の商品化の研究、養殖技術の開発などを聴取することにより、今後の農業、林業及び水産業に関する事項の委員会審査に資するものとします。

(2) 調査先出席者

- ・ 石黒雄一 所長
- ・ 石井洋 企画研究部長

(3) 委員からのあいさつ

(4) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

- ① 水産技術センターの概要について
- ② 藻場再生の研究と取り組みについて
- ③ 茜身（マグロ血合肉）の商品開発と普及促進について
- ④ 魚類等（サーモン）養殖技術の開発について
- ⑤ トラフグの資源開発について
- ⑥ 早熟カジメの培養養殖、キャベツウニの養殖の現場を見学

(5) 質疑応答

・ 【質疑】

水産試験場として、これまで取り組んできて、研究したことが商品等につながったなどの研究成果について教えてほしい。

・ 【応答】

例えばクマエビの種苗生産。クマエビは台湾産のエビですが、温暖化が進むと取れるものが変わるとの考えから南方のクマエビの種苗生産を研究しました。まだ実用化する必要性がないので、技術開発だけ先にやっていくという事例となります。

また、小田原の相模湾試験場では、定置網の研究を長年やっていました。定置網は本県の基幹漁業ですが、潮の流れ、急潮という湾の中の潮の流れが早くなる現象によって網が流される事故が過去にありました。定置網は1つの網で3億・4億するので、流されると損害が大きく、また何ヶ月も復活に時間がかかります。相模湾試験場では、海流水槽という大きな水槽で模型の定置網を入れ、ロープを太くすることや浮きの抵抗を少なくするための形状の研究など、流れの早い海流対策を研究し、実現したことで被害を防ぐことにつながった。また、潮の流れを予想するために流速を測り、その予兆を捉えて急潮の注意報な

などを発出するなどの対策にもつなげています。さらに、台風などで被害を少なくするために漁具の被害を防ぐための対策をしました。

川の方ではアユの種苗生産で漁業者や釣り人さんから、飼慣らされたアユではなく、攻撃性のある天然に近いアユの生産を要望され、安定した種苗生産と要望に応えられるアユの生産の研究をして実用化しているなどがあります。

・ **【質疑】**

藻場の再生を進めていますが、海は広大なので藻場再生の見通しやどのくらいの期間かかるのか。また、今後の取り組みの普及をどう進めるかについて聞かせてほしい。

・ **【応答】**

非常に難しいところがある。磯焼けの原因が、地球温暖化など我々の手の及ばない範囲のことが大きな原因になっているところがあります。また、もう一つの原因として黒潮の大蛇行があります。黒潮は水温が高く、相模湾はその黒潮の影響を非常に受ける湾です。その黒潮の大蛇行が今年にほぼ解消しているので、冬場の水温が下がれば、食害生物の活性が下がるので環境が変わることを期待しています。

カジメ畑を作ることによって多少効果がありますが、一方で入れたものがほとんど食べられることもあります。しかし、湾の中には、食害に合わなかった場所があったので、その要因を徹底的に調査してその条件を明らかにして、食害に合わない確率を上げるように取り組んでいるところです。まだ実験段階で結果が出ていないので、見通しはつかないところです。

・ **【質疑】**

実際はかなりスパンの長い話になると思いますが、黒潮の大蛇行などの環境が変わったとしても藻場再生の取り組みをずっと続けたいといけないのか、それとも自然に藻場が再生し始めたら終わりなのか。その見極めが必要になると思いますが、どう考えていますか。

・ **【応答】**

今は人工的に畑を設置していますが、海藻類が自然に生えてきて、それが数年維持できるようになれば対策は必要なくなると思います。

・ **【質疑】**

藻場の面積をどのくらいまで回復したいという目標はありますか。

・ **【応答】**

もともと30年前は自然と藻場が形成され、魚介類が安定的に取れていたもので、その時と同じくらいまで再生したいと思っています。実際に周りの水温や食害生物が軽減すれば、自然と藻場が再生すると考えています。それは相当難しいが、環境の話なので、もしかしたら、

条件が変われば一変するということもあってと思います。

・ 【質疑】

温暖化の問題は改善の見通しがあまりない中で、温暖化の問題は単純に気温が上がるだけではなく、食物生産に大きな影響を及ぼしています。藻場再生だけでなく、海産物の生産について考えているところはあるですか。

・ 【応答】

藻場に頼らない例えば我々漁業生産を上げるというのをやっている例でいえば、砂浜域のハマグリを生産や養殖による生産などがあります。

・ 【質疑】

地球温暖化対策の中でブルーカーボンの考え方が取り上げられていますが、地球温暖化対策にどのような影響があるのか、ご存知のことがあれば教えてほしい。

・ 【応答】

あまり詳しくないが、二酸化炭素の固定量は海っていうのが高いと聞いています。確かにプランクトンなどを含めればあり、海藻だけでなく海藻から出る粘着物にもカーボン固定にもつながっているということで、ブルーカーボンの算定に入っているのも、能力がきつとあるんだろうと思います。しかし、それが温暖化を抑える本当に切り札になるかというところではないと思いますが、何もやらないよりは実行していくことが必要だと思います。

・ 【質疑】

カジメは冬の時期が成長しやすいということでしょうか。

・ 【応答】

もともとカジメは冬場に芽が出て成長し、夏場に夏枯れと言って少し葉の先が枯れて、また新芽が出てきます。そして1年で枯れず、5年以上それを繰り返すといった成長の仕方をしています。冬場の水温が適していれば成長が良くなりますし、同時にアイゴなどの魚の活性が落ちるので復活してくれます。ただ秋などに水温が高いと魚の活性が高いままなので、そこをどうクリアするかが課題となっています。そこでカジメ畑で、早熟カジメの成熟直前のものを海に投入し、投入したと同時に種をまくようにして、繁殖する確率を上げようということに取り組んでいます。

・ 【質疑】

藻場は稚魚の成育に大切だと言われていたと思いますが、藻場の再生の一番の目的はそういう稚魚や魚の生育に適した場所をどう増やすかというところにあるということですか。

・ 【応答】

私たちは、漁獲量を増やすことが目的で、カジメが増えてもそれは漁業者の生産のプラスにはなりません。

・ **【質疑】**

血合は他の部位より、安価なのでしょうか。

・ **【応答】**

今までは全く値段が付きませんでした。基本的には値段つかないので、マグロを切り分ける時にゴミとして出されていましたが、現在のような取り組みが進んだことで、値段がつくようになり、市外の飲食店や県内の飲食店等からも若干引き合いが最近出てくるようになってきました。また、週 80g を週 3 回、それを 3 週間続けただけで大幅な酸化ストレスの軽減効果が出たことで、アンチオキシダントのサプリメントを飲むよりもおいしくて、健康づくりに役立つという非常に将来的にはかなり有望な素材だと考えています。

・ **【質疑】**

これらの料理が、一般の人にどのように広がるかが重要だと思いますが。

・ **【応答】**

食べてみると魚じゃなく肉っぽい感じがすることで、子どもに非常に人気です。イベントで試食をすると最初に子どもが来て、そのあと戻って親を連れてきて買って行ったりします。ただ高齢者の方には血合と言うと敬遠されがちなので、健康効果があることを強調して召し上がってもらっています。また、刺身で食べる時も解凍方法が難しい。そこで、認証制度を設けて、扱い方ですとか赤身の性質を勉強していただいたところで提供していただいている。

・ **【質疑】**

血合は、場所的にはどの辺にあるのでしょうか？

・ **【応答】**

マグロの皮の近くにありますが。そしてマグロ類は骨の近くにもあり、他の魚よりも血合の割合が多く、約 9% です。また、内臓などを落とした段階だと約 24% となります。それだけ使われていなかったわけです。

・ **【質疑】**

血合というと臭いからと避けられるような印象が多いですが。

・ **【応答】**

血合という名前にその印象があるので、三浦商工会議所のみなさんと名前を募集しようとして去年の 10 月に公募して、「茜身」という名前を大々的にイベントしながら発表し、それを定着させようとして取り組んでいます。

・ **【現場での質疑】**

浮遊培養のいいところはこういったところですか

・ 【応答】

まんべんなく光が全体に入ること、成長が良くなります。

・ 【現地での質疑】

ここで培養した早熟カジメはどのように配布し、畑づくりに活用されるのですか。

・ 【応答】

漁協や自治体に無償で配布しています。

・ 【現地での質疑】

キャベツウニの養殖で苦労している点はどのようなところですか。

・ 【応答】

ムラサキウニはとげが長いので動きにくい、餌をとるのにいい場所を見つけると動かず、自分で餌を取りにいかない特徴があります。また、キャベツは海水に入れると基本的には浮いてしまい、養殖の入れ物の片方に寄ってしまいます。そのことで、餌が寄った方のウニばかりが太り、もう片方は太らない現象が起きました。そして出荷時にウニの中身が分からないため、開けてみると大きな差があり、仲買さんが引き取ってくれなくなってしまいました。対策として、養殖の入れ物の水深をギリギリにして餌をまくことでトゲに引っかかるようにしたこと。また、ムラサキウニの間隔をできるだけ隙間がないようにするなどを行った。

また、ムラサキウニの時期は夏場で、出荷適時が1ヶ月間くらいしかなく、しかも年に1回しかありません。結局お金が入る時期が年に1回しかないところが養殖の進まない要因になっている。その対策として、別のウニを裏作として養殖することを検討している。ただ、その別のウニというのがアカウニと言って幻のウニと言われており、数が少ないので、今後の検討課題となっている。

(6) 調査結果

- ・ 水産技術センターで取り組んでいる研究の内容を聴くことができ大変参考になりました。種苗生産や養殖の技術研究、商品の普及促進など、水産業や漁業者の活動を支える仕事の内容について知ることができ、今後の質疑でも行かせる内容だったと思います。
- ・ 磯焼け対策については、原因究明をはじめ、対策としての早熟カジメの培養とカジメ畑の設置、ムラサキウニなどの食害生物を減らすための取り組みが積極的に行われている様子がよくわかりました。この問題は大きな原因として地球温暖化があり、本来はその原因を取り除くための緩和策の早急な取り組みが必要ですが、それがすぐには達成しない中でもいかに海の環境を保全し、漁業者のために取り組むかという点で大変参考になりました。今後、研究することやその対策の実施が成果として現れるように期待したいと思います。
- ・ 地球温暖化対策としては磯焼け対策に限らず、サーモンや貝類の養殖の研究など地球温暖化

対策の適応策として新たな水産資源の開発に取り組んでいることも参考になりました。

- ・ 水産技術センターは地域の漁業者をはじめとした関係者との連携でその地にあった水産資源の開発と取り組みをしており、地域との関係が非常に重要だということを感じることができました。このような視点をもって、今後の委員会論議を進めたいと思います。





4. 農業技術センター三浦半島地区事務所

(1) 調査目的

農業技術センターは本所と 4 つの地区事務所で構成されているが、それぞれの地区で取り組んでいることは、その地域性が大きく関わっているとのことです。三浦半島は首都圏近郊でありながら、キャベツやダイコン、カボチャ、スイカなどの生産量が多く、非常に豊かな農業地域となっています。

一方で、地球温暖化によって、作物の生育や収穫量に影響があることや昨今の物価高騰の影響、後継者の問題などもあり、今後の農業振興の不透明性があります。現在三浦半島地区事務所で行っていることを聴取をすることにより、今後の農業、林業及び水産業に関する事項の委員会審査に資するものとしてします。

(2) 調査先出席者

- ・ 田村律子 所長
- ・ 室井義広 研究課長
- ・ 松浦京子 普及指導課長

(3) 委員からのあいさつ

(4) 概要説明

以下の内容等について、説明があった。

- ① ほ場等の現地説明
- ② 農業技術センターの概要について

③ 現在取り組んでいる内容について

(5) 質疑応答

・ 【質疑】

温暖化の取り組みとして、特にされていることはありますか。

・ 【応答】

主要な野菜の安定生産ということと切り離せないところがあり、品種の選定に関しても温暖化の影響が問題にはなっております。この問題は技術を取り入れれば解決できるということは本当に難しく、例えば去年と今年でも暑くなる時期や気温の違いなど気象変動が毎年ありますので対応が難しいところです。その中で、品種や被覆資材などの選定で、できるところから農家の方に提案できるように細かい試験をしています。また、基本的に土作りというのが非常に大事になるので、緑肥を取り入れた土造りの確立と普及や使用する肥料等の相談を受けています。

・ 【質疑】

品種というのは作物の種類ではなくて、作物の中の種類ということですか。

・ 【応答】

そのダイコンならダイコンの中でのどの品種をやるかということをや永遠の課題と言ってもいい感じです。

・ 【質疑】

同じダイコンでも品種がいっぱいあり、暑さ寒さなどによって、どの種類がいいかなどを毎年農協さんとやり取りするということか。

・ 【応答】

毎年、ダイコンとキャベツについては、品種比較展示会をしており、試験場内ではなく現場の農家さんの畑でいくつかの農協や種苗生産メーカーと一緒にどの品種でどのような作型で実施するかをみなさんと議論し、数品種を決めて、各作型ごとに検討会をやり、収量のデータも取り、成績書を出して、次の年の農業での取扱品種に上げるなどの情報提供をしています。

農家には種屋さんなどの業者が種を売り込みに来ており、各農家で品種が違っていると農協が一つにまとめて同じダイコンとして売ることができなくなるため、県が一定程度品種を絞り込んで選ぶこととなりました。

ダイコンといっても、種をまく時期と収穫時期が早い品種で8月くらいからまく人もいます。主力は9月の上旬です。また、10月にまくこともあり、収穫も年内のものもあれば1月、2月、3月くらいとなるものもあります。いろいろなメーカーから毎年新しい品種が発売されており、品種によっては販売中止になったものまであるため、大変多い品種とな

っています。例えば、9月の上旬に種をまいて年内に収穫する品種でも20から30種類くらいになるので、ある程度指標を作らないと農家も困ることになります。

ダイコンなどは、よく比べると味も結構違います。形もお尻の形で三浦産のダイコンだと見て分かったりします。

また、作り方についても北関東の寒い地域などは、ビニールシートを敷いて保温しますが、三浦半島は温暖なため必要なく、作業しやすい状況です。

・ **【質疑】**

低農薬や無農薬、有機栽培など、作り方がいろいろあると思いますが、技術センターの方も農家の人たちといっしょにやっているのですか。

・ **【応答】**

農家の方の意向が前提にあります。化学肥料や化学農薬はできるだけ減らしたいという気持ちは農家のみなさんにもっています。県としてもできるだけ持続的な環境に優しい農業を推進する思いでやっており、相談があれば提案をしています。

農業セミナーでも病害虫対策の講座がありますが、農薬に頼らない防除法、虫除けのサンサンネットなどで被覆したり、土壌消毒についてはマリーゴールドはダイコンなどのネグサレセンチュウの抑制効果があります。また、キャベツの内毒の消毒方法として、このセンターの開発技術になっており、農薬だけに頼らない防除方法を紹介して取り入れてもらっています。

・ **【質疑】**

地球温暖化対策との関係では、品種ではなく作物転換の相談もありますか。

・ **【応答】**

それはかなりありました。ダイコンとキャベツが近年安く、一方で、資材費、輸送費などが上昇していて、経営が厳しい状況で他の作物についての相談はいろいろな場面で話題になりました。三浦半島でダイコンやキャベツの補完としてできるもの、置き換わるものの可能性を探り、みなさんに情報を伝えています。その一つに玉ねぎ、超極わせ玉ねぎやニンジン、セロリ、サトイモなどがあります。それらを農家の人が試行的にやり、販売までつながっているのが玉ねぎと、ニンジンなどです。

しかし、農家さんの気質もあり、ダイコンやキャベツが高値になるとこれまで試行していたものではなく、ダイコンとキャベツでいいとなるケースもあります。やはり、ダイコンやキャベツなどの生産は、精度の高い完璧なものできており、値段が高いのであればそれがよいという気持ちが根底にはあり、他の作物がなかなか定着しないところがあります。しかし、作物の切り替えの相談があった時に提案ができるように常にストックしてお

きたいと思います。

・ 【質疑】

耕作放棄地が増えていると思いますが、新規就農者の支援について取り組んでいることを教えてほしい。

・ 【応答】

相談は来ていますが、難しい問題です。現在は、希望している人の受け入れ体制を整える必要があり、農業アカデミーなどの先進事例を紹介したり、基礎セミナーを増やしたりしています。

三浦市でも考える必要があると思っていますが、規模を拡大するために農地集約を始めている農家もあり、多角経営などを考えている若い方もいます。確かに小さい規模の農家がやめていることも多くなっていますが、一方で農地集約などで集まっているところも見られます。

・ 【質疑】

新規参入で土地を購入して農業を行うにはハードルが高いように思いますが、実際はどうでしょうか。

・ 【応答】

露地野菜であれば、土地を借りて行うことがいいと思います。一方で、温室などの施設を建てることやみかんなどの果樹で木を植えたりすると貸してくれる農家さんが難しいと思います。

新規参入されている方は野菜が多く、最初はそこから入り、面積を拡大しながら進めることが現実的だと思います。

・ 【質疑】

本所に行った時に湘南ゴールドや湘南ポモロンという品種改良を行った話を聞き、研究のイメージを持っていましたが、安定生産が研究の一つというのは考えていませんでした。安定生産や品種改良などについてももう少し具体的に教えてほしい。

・ 【応答】

安定生産という点では、出来上がっているものにさらに磨きをかけるという感じです。

品種改良等ですが、これは国の方と棲み分けができており、品種の元になるようなものについては国の試験場などが作り、それが地域に適応するかという点を地域で進めるとなっています。その中で、三浦でも作れるようなものを検討し、品種化されるものもあります。かつては、一から作ったものもあり、ラグビーボールスイカという細長くラグビーボールの形をしたスイカは、この試験場で一から作ったものです。ただ、スイカなどの専門の種屋さんが何社もあり、そこで競うことは難しい状況です。今は、一から作るよりも途

中の段階で評価をすることや出来上がったものの産地適応性などを研究することが中心になっています。また、今、資材が高騰しており、生産コストを下げる工夫なども重要になっています。一例を挙げると、ダイコンの種は1箇所に数粒をまきますが、以前は種の精度も悪く1箇所に5~7粒まき、成長段階で間引きをしていましたが、1箇所にまく数が少なくなって、究極は一粒しかまかないことができればとても効率的になります。そのため、研究をすることになれば、種の代金も安くなるので、そのような研究も必要になります。

・ **【質疑】**

品種改良と遺伝子組み替えの違いについて教えてほしい。

・ **【応答】**

遺伝子の組み合わせはある程度分かっており、どの遺伝子が何に関与しているか、例えば花の色に関与している遺伝子などが分かればそこを組み替えることが遺伝子操作となります。鎖状になっている遺伝子の場所を切り取って、別の遺伝子のものを貼り付ける作業をします。

一方で、おしべとめしべを人工的に交配させ、交配した中から良さそうなものを継続して栽培していくことで優先率が高くなりますが、そのことを系統選抜と言います。何回も同じようなことを繰り返すため時間がかかります。それを短縮するのが遺伝子操作です。しかし、最終的に定着し、固定させないといけないので、遺伝子組み替えをしたとしても、畑で何代か代を重ね、同じようなものができることで定着させていかなければならないので、最終段階は同じになります。

最初の段階から気が遠くなるような多くの種類の中から、目で見て選抜する育種という種を育てる作業とその途中を省いて最終段階だけ行うかの差となります。

遺伝子組み換えは、効率よく新しい品種を生み出す利点がある一方で、人為的に操作するため、どのような品種ができるかの予測ができないところもあります。また、自然界にそれを畑に植えると花粉が飛び、自然界に普通に栽培されているものと交配し、またその種子が散らばるようになれば、今までにないものが、自然に広がってしまう可能性があるため日本は慎重な対応をしてきたと思います。

・ **【質疑】**

要望や改善点などがあれば教えてほしい。

・ **【応答】**

ここは産地の真ん中にありますので、この環境が維持されることが大切だと思っています。それが、この事務所の研究レベルや普及指導のレベルを維持することにつながると思

います。駅前にあるので駅前に県の試験場が必要なのかという議論にならないといいと思います。

長年作ってきた土を大切にしたいと思います。例えば、草刈りにしても機械を使うことによって土が押されダイコンの下の方に障害が出たりするときちんとした試験ができないので、機械を使わず手で除草をするなどをしています。また、雑草ごと畑の中に入れると雑草の根や種が残り、また雑草が出るので必ず手作業をしていることもあります。人が集まりやすいこと近くの農家の人が見ることができるなどの環境も大切だと思います。

(6) 調査結果

- ・ 農業技術センターは本所に伺ったことはありましたが、地区事務所に来るのは初めてでした。それぞれの地区ではその地域に根ざした農産物の育成や生産方法の開発、技術支援などを行っていることをよく知ることができました。特に具体例を示しながら話していただいたことで、品種の選定や育成方法の工夫など、一つ一つ丁寧に農業者の支援をしている様子が目に浮かぶような感じを受け、支援の内容を知るうえで大変よかったと思います。
- ・ 研究というと品種改良などを行うことを想像していましたが、安定生産のための工夫をすることが大変だということに気づくことができました。毎年の天候など、自然環境が生産に大きく影響を及ぼしているため、そういった変化に対応するための地道な取り組みが地域の生産を守っていることが大切だと思いました。
- ・ 地球温暖化の中で、品種改良や作物の変更のための研究など、いろいろな対策をしていることも知ることができました。
- ・ 農業技術センターが地域に密着し、地域との連携の重要性について話されたのも印象的でした。農業者のいろいろな相談を受け、解決するためにはいろいろな人が来所できる関係が重要であり、関係者が連携できる条件を作っていることは大切だと思いました。同時に新規就農者の支援やいろいろな研究グループの支援なども行っていることを知ることができて参考になりました。
- ・ 最後の要望のところ、この事務所の環境を大切にしていることもよくわかりました。今後の委員会での論議の参考にしたいと思います。

